

不審者への対応をどうするか
～想定外を想定することの重要性～

今回は、“学校を楽しむ”というタイトルにはふさわしくないようなテーマですが、このようなことが起きない学校、また不幸にも起きてしまったときに、子どもたちを守るための適切な対応ができる学校であることが、“楽しい学校”をつくる基本だと思います。

今年5月8日に、立川市立の小学校において、不審者の侵入による傷害事件があったばかりですので、先生方はこのテーマについて、より緊迫感をもって読んでいただけるのではないかと思います。

かつて、わが国の小学校で大変な惨事が起き、それ以来、学校の不審者対応が進みました。それは大阪で起きた池田小学校の事件です。まずはその概要について説明します。

2001年（平成13年）6月8日、午前10時、ある男が大阪教育大学附属池田小学校に侵入しました。その当日、彼は正門から入ろうとしましたが、校門が閉まっていたため、校舎裏にまわり、無施錠だった自動車専用門から侵入しました。これが第一の問題点です。

男は体育館の前を通過して校舎に向かう途中、1人の教師とすれ違いましたが、教師は児童の保護者だと思い、会釈しただけで声はかけませんでした。これが第二の問題点です。

男は用意しておいた包丁を手に、まず2年生の教室に校庭から入り、児童5人を無言で刺しました。続いてテラスから隣の2年教室に移り、教室の後ろにいた児童を立て続けに3人切りつけました。気づいた担任が「逃げて」と叫んで、急いで事務室へ

駆け込み、助けを求めましたが、その間も男は児童を襲い、合わせて8人が犠牲になりました。これが第三の問題点です。

その後、男は廊下に出て、隣の2年教室に入り、ここでも4人の児童を襲いました。男が教室から出たところで、1人の教師がタックルして防ごうとしたのですが、男はその教師の胸を刺して重傷を負わせました。教師の「逃げろ！」という声に反応して逃げ出した児童たちを、男が追いかけて、しばらくして引き返し、今度は1年教室に入って黒板の傍にいた4人の児童を切りつけました。これが第四の問題点です。

その後、副校長や教員らが駆けつけて、男と格闘の末、背中や顔を包丁で負傷しながらも、男を押さえつけることに成功しました。

これら一連の凶行は、わずか10分間の出来事でした。学校の教職員たちは、いったい何人の児童が切りつけられ、どこに倒れているのかすら、すぐには判らず、そのため通報も遅れてしまいました。これが第五の問題点です。

結果として、男は児童8人を殺害、他児童13人、教師2人に重軽傷を負わせたのです。

これが事件の顛末です。当時は、学校に不審者が侵入して、このような凶行を行うことなど全く想定していなかったため、学校側の対応に多くの非難が浴びせられることになりました。同時に、多くの問題点が浮き彫りになった事件でもありました。

第一の問題点は、施錠がしっかりなされていなかったことです。第二の問題点は、教職員に不審者侵入に対する意識が乏しく、声掛けすらしなかったことです。第三の問題点は、担任がパニックになり児童を置き去りにして助けを求めに行ったことです。

第四の問題点は、緊急時の行動が組織化されていなかったため、犯人に対する対処が遅れたことです。第五の問題点は、事後の対応が組織化されておらず、救命措置が遅れたことです。

とりわけ救命措置が遅れた第五の問題点については、犯人を取り押さえてから警察による犯人逮捕までの間、管理職等が混乱の中で事件の全容をつかむことができませんでした。そのため、児童に対する適切な避難誘導、救命活動、搬送処置など、組織的な対処行動がとれず、死亡した8名の児童は20分間前後も放置されたままになりました。もっと早く対処していれば助かった命があったはずです。

事後の対応でも不手際が続き、混乱の中、教員が救急車に乗らず児童に付き添わなかったため、保護者への児童の搬送先病院の連絡も遅れました。そのため、自力で探し回った病院で死亡した我が子と対面することになった保護者もありました。

この事件から学ぶべきことは多々あります。学校の管理職は、学校の安全措置の情報を把握し、不審者に対する対応について、教職員間で十分な共通認識を図り、施錠、来校者対応等、職員全員による安全管理体制を構築することが必要です。

具体的には、例えば、学校を訪れた部外者への対応は、複数の教員ですること。危害が加えられそうな場合には、ホイッスルや大声を出して危険を知らせ救援を求めること。何をおいても子どもたちの安全を確保するために、避難指示を徹底することやその訓練を日頃からしておくこと。机等でバリケードをつくり教室に不審者を入らせないようにすること、など多々考えられます。また暴漢に対しては、さすまたの使用が考えられますが、手元にない場合には、とりあえず教室の椅子を持って脚を相手に向けるこ

とで防御する方法もあります。

私たちも人間ですのでだれでも恐怖心があり、動揺もします。しかし、私たちには子どもたちの命を守る責務があります。教師がパニックを起こせば、子どもたちの命を守ることができません。勇気をもって対処するためには、“想定外を想定”した日頃の訓練がものをいいます。つまり心の準備をしておくということです。それは防犯を“意識化する”ということでもあり、それにより突発事案が起きても、パニックになりにくく、落ち着いて行動しやすくなるのです。事前の準備により、子どもたちへの、できるだけ適切な指導が可能になり、職員間の連携や機敏な対応も可能になります。

このような事案は、めったに起きないかもしれませんが、可能性がゼロではありません。そのための準備はやはりどうしても必要です。私たちが真剣に対応している、その姿勢が子どもたちや保護者に安心感を与えるのです。先生方には、本当に大変だと思いますが、どうかその思いをもって、日頃から“想定外を想定”した準備ををしていただきたいと思います。

すべては、子どもたちの笑顔のために。

(市川三郷町教育長 渡井 渡)

